



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

認知症といえは抑肝散？

認知症といえは

認知症に使われる漢方薬はいくつかありますが、抑肝散は、医師・薬剤師が認知症と言われて、まず最初に頭に浮かぶ漢方薬と言っても過言ではないでしょう。漢方薬の売り上げランキングを見ると、平成16年には20位以下のランク外だったが、24年には4位に急上昇しています。業界での注目度がうかがえます。

抑肝散の3つの特徴

・漢方では、肝は心や精神を意味します。「肝つ玉」「肝試し」といった言葉からも連想されます。抑肝散は、文字通り、肝(精神神経症状)を、抑えます。

・適応証(体質)は、中間証(やや虚証)や虚弱体質、血虚(貧血症状・血流不全)、気上衝(のぼせ、興奮、緊張)です。

・認知症の周辺症状(興奮、怒り、

徘徊、不眠など)に有効とされています。

抑肝散の適応

抑肝散は神経の高ぶりや筋肉の張りを抑えて、心身ともに楽にしてくれます。具体的には、イライラ感や不眠などの精神神経症状、手足のふるえ、けいれん、子どもの夜なき・ひきつけなどに適応します。もともと赤ちゃんや子どもに使われる漢方薬であり、疳の強い子どもにも好んで用いられ、腹直筋の緊張も使用目安です。最近では、神経症、不眠症、さらには認知症や統合失調症、躁うつ病、てんかん、パーキンソン病などの補助薬として応用されています。

抑肝散を解体する

抑肝散は7種類の生薬から構成されています。

「釣藤鈎」は鎮静作用に加え、脳循環改善作用があり、手足のふるえ・けいれんなどに効果的です。「柴胡」は熱や炎症をさまし、腹直筋など筋肉の緊張を緩めます。これに血行を改

善し貧血症状を治す「当歸」と「川芎」、水分循環を改善する「蒼朮」と「茯苓」、緩和作用の「甘草」が加わり効果を発揮します。

抑肝散加陳皮半夏との使い分け

漢方で「加」とは漢方薬に生薬を加える場合に使う文字です。ちなみに「合」は漢方薬と漢方薬をくっつける場合に使います。抑肝散加陳皮半夏は抑肝散に健胃薬の陳皮と、吐き気をおさえ気分を落ち着ける半夏が加えられたもので、抑肝散に比べて胃腸の働きが弱い方に適応されます。また、攻撃的な性格に加え抑うつ症状がみられる場合や、抑肝散で症状がマイルドになり、継続を考慮する場合には使えるかもしれません。ただ、抑制系の漢方を配合したせいで、抑肝散本来の怒りを抑える作用は抑えられる見方もでき、出現する症状による使い分けが必要です。生薬を加えることが必ずしも効果を増強させるとはかぎりません。

(長田区野瀬病院薬剤科 原 克樹)